『バランスシートで読みとく世界経済史』



著者：ジェーン・グリーソン・ホワイト
翻訳：川添 節子
出版：日経 BP 社
発行：2014 年 10 月 15 日

1440 年代にフィレンツェ近くの町で生まれたフランシスコ修道会の修道士、ルカ・パチョーリが、はじめてヴェネツィア式簿記の論文を出版した。まさに複式簿記（Double Entry）の考案者である。世界初の簿記の専門書を著し、複式簿記の体系化と普及に貢献した。ヨーロッパ各地で出版された簿記の専門書はすべて、パチョーリの論文をもとにしており、現代会計の礎を築いたのである。

筆者は 13 世紀後半にイタリアで広まったこのしくみが 21 世紀の世界経済を支配するに至るまでのいきさつを追うのである。複式簿記の考え方は、今日では、国民所得統計へと応用されたが、国の富を測る物差しであるＧＮＰ（国民総生産）やＧＤＰ（国内総生産）は、はたして本当に国の幸福度を測る指標としてふさわしいのだろうか。

企業は年に一度、自らの透明性を担保するために、財務諸表を作成して公表する。これにより企業の行動はチェックされ、市場は効率よく機能するとされてきた。ところが、これらの公開情報が、企業活動の実態を表しているとは限らない。本書は国民所得の測定に疑問を投げかけている。大気汚染、タバコの広告、交通事故の犠牲者を運ぶ救急車までもが国民所得の勘定に計上され、一方で、子どもたちの健康や質の高い教育、遊びの楽しさは考慮されない。またＧＮＰを開発した経済学者のサイモン・クズネッツ本人も、国民勘定に金銭報酬のない家事労働も含めるべきだと考えていた。

さらには、会計の世界ではあらゆるものを貨幣価値変換するため、地球が人間に無償で与えてくれる生存環境には最低限の価値しか見出してこなかった。会計の論理を振りかざすことで地球を傷つけており、簿記には地球の存亡がかかっていると訴えている。この状況のままでは地球環境の破壊につながりかねないため、著者は、今こそアカウンタント（会計士）が自然を会計に含めることのできる最後の希望の星となりうると主張する。

人類のもっとも偉大な発明の一つとされている文字は、アカウンタントによって発明されたという説が有力となっている。古代メソポタミアにはじめて農業を主体とした集落が出現し、人々が農産物の生産量と交換を記録し始めた。円錐、球、卵、円柱の形をした焼成粘土のトークンが発見されたのもそのころである。このトークンは単純な会計記録であり、そのころの会計記録が、情報を伝達することを目的としてつくられた目に見える最初の記号システム、そして記憶を保存するためにつくられた最初の技術であった。会計の起源から、旅するイタリア商人フィボナッチが彼の著書『算盤の書』で紹介した、アラブの商人たちが使っていたインド・アラビア数字の普及、印刷技術、重商主義の勃興など、世界を変える大きな出来事を経て、現代の資本主義社会に至るまで、一貫して「会計」を通して世界経済の歴史を語っているところが興味深い。

高等学校や大学で、商業を学ぶ生徒、学生にとって「簿記」は必ず学ぶ基本中の基本である。本書はその複式簿記の発展、普及の歴史をたどりながら、会計言語によるコミュニケーションという新たな手段を獲得した人類の歴史物語である。

序　章　ロバート・ケネディと富の測定
第１章　会計 ― コミュニケーションの始まり
第２章　商人と数学
第３章　ルカ・パチョーリ、有名人になる
第４章　パチョーリの簿記論
第５章　複式簿記の普及
第６章　産業革命と会計士の誕生
第７章　複式簿記と資本主義 ― 卵が先か、鶏が先か
第８章　ケインズ ― 複式簿記と国富論

起業教育研究会 企画委員
兵庫県立阪神昆陽高等学校 教頭　井上 仁志